The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ヴォイスの体系における〈再帰性〉 : 日・韓対照研究
Author(s)	権, 勝林
Citation	大阪大学, 1996, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/39715
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【3】

氏　　名	權（こん）　勝林（すんりむ）
博士の専攻分野の名称	博　士（言語文化学）
学位記番号	第　12559　号
学位授与年月日	平成8年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学位論文名	**ヴォイスの体系における〈再帰性〉 －日・韓対照研究－**
論文審査委員	（主査） 教　授　高岡　幸一 （副査） 教　授　玉井　俊紀　　助教授　春木　仁孝

論文内容の要旨

日本語の研究史の中には，国語学から日本語学への流れを見ることができる。国語学が日本語を日本語の中で解きあかそうとする立場であるのに対し，日本語学は諸言語の一つとして日本語を捉え，一般言語学的な理論に基づいて日本語を解きあかそうとする立場と言えよう。このような流れを汲むものの一つに，他の言語との対照研究の流れがある。言語一般に通用する普遍的なレベルの理論が存在するのに対し，個別言語レベルではそれぞれの言語における特徴が存在する。対照研究では一方の個別言語の特徴としての言語事実がもう一方の言語の文法現象の分析に有効に働くことがある。対照研究の価値の一つはここにあるだろう。対照研究といえば，これまでは英語を主とする欧米語との比較対照が中心となっている。が，近年，日本へのアジア諸国からの留学生の増加とともに，言語学の分野でもアジアの諸言語と日本語との対照研究が増えてきている。その中でも，本稿は，日本語にもっとも類似していると言われる韓国語との対照研究を目指すものである。

日本語と韓国語は英語・フランス語等に比べ，形式的な制約の緩い言語と言える。例えば，両言語は，語順の制限，動詞の一致などの制限が少ないという特徴を共有する。一方で，韓国語は，統語現象が意味の相違に敏感に反応する特徴を持っている。即ち，ヴォイスの諸カテゴリーを表す形態が複数あり，その形態の相違は動詞の意味の相違に反応して現れるものと考えられる。このような現象が日本語の文法現象をより適切に捉えるのに有効に働く。他方で，日本語は一つの形態で複数のカテゴリーをカバーすることのできる言語である。これは逆に見れば，一つの形態でカバーされているカテゴリー間の関連性を示すものであり，他の言語の研究において，より上位のレベルの範疇を定めるのに役立つ。

本稿は，類型論的な知見に基づき，対象言語を日本語と韓国語とに限定した対照言語学的な立場からの研究である。また，論の展開においては記述的手法を採用する。意味と形式は表裏一体の関係にあるものであり，意味は形式に反映されると考えられる。一つの形式として統語現象を捉え，動詞あるいは動詞句の意味と統語現象の間には必然的な関連があると考える。こういった意味で本稿は機能的な立場からの考察であり，仁田（1980）で唱えられている語彙論的統語論（Lexico－Syntax）の立場に沿うものと言っていいだろう。

本稿の対象とする範疇は，動詞とヴォイスおよび両範疇に関連する言語学的概念である。例えば，ヴォイスと深い関わりを持つと言われている概念に〈他動性〉がある。他動性の尺度を用いることで，解明されるヴォイス現象があることを全面的に否定するわけではないが，他動性ですべてのヴォイス現象が説明されるとは言えないことを指摘す

る。その上で，本稿では他動性とともにヴォイスの諸現象の解明に有効に働く概念として〈再帰性〉という概念を新たに提示したい。次に，再帰性の実現の方略を分析し，最初の段階として〈再帰動詞〉の認定を行う。さらに，〈再帰用法〉を分析し，その階層構造を明らかにする。言語学的な概念としての再帰性を確定し，その具体的な現れとしての再帰動詞および再帰用法を分析するのが本稿の一次的な目的である。

次に，ヴォイスの諸現象を分析するにあたって，今まで注目を浴びることの少なかった〈再帰性〉が有効な概念であることを主張する。実際に，日本語と韓国語を対象に，〈ヴォイス〉の諸カテゴリーを分析することで，再帰性を設定する妥当性および有効性を検証していく。ここでヴォイスの分析を行うのは，一次的には，再帰性という概念を確定し，その有効性を主張するための手段である。と同時に，再帰性を他動性とともにダイナミックに捉え，再帰性のヴォイスでの働き方を追究することで，ヴォイスの体系を整合的に分析することが本稿の最終的な目的である。

再帰構文，再帰態，再帰動詞というテーマの研究は諸言語で様々な形で行われている。しかしながら，意味概念の再帰性に関する研究はさほど見られない。本稿では再帰性が他動性という概念とともにヴォイスの様々な現象において深く関わっていることを分析・提示したものである。従って，本論は，再帰性という概念それ自体を考察した部分と再帰性とヴォイスとの関連性を分析した部分に大きく分かれている。序論と結論を除く本論部は3部からなっている。本文の構成に沿って結論を述べると次のとおりである。

まず，第2部は〈再帰性〉を中心に考察が行われている。第2章では，〈再帰性〉の特徴を明らかにした。つまり，再帰性は，動作主を中心とする求心的運動という運動の方向と，動作主と対格補語が所有関係を有するという所有性によって特徴づけられることを主張した。第3章では，再帰性の実現パターンの内，動詞そのものが再帰性を帯びる〈再帰動詞〉について考察した。ここでは，再帰性の意味素性を参考に再帰動詞を規定する基準を設定し，意味的な規定によって再帰動詞の認定を行った。具体的には，日本語と韓国語，それぞれの言語における再帰動詞の分布を示し，下位タイプを分類した。また，下位タイプの間の相違点を分析した。再帰性は他動性とは異なり，動詞の性質を変えるような条件が満たされると，通常の動詞の意味とは関係なく，再帰的意味を表すことができる。そこで，第4章では，対格補語あるいは与格補語の性質によって，再帰性が実現する〈再帰用法〉に焦点を当て，再帰用法の階層構造を明らかにした。具体的には，〈対格型再帰用法〉と〈与格型再帰用法〉に分けて分析した。動作の到達点を示す与格補語に身体名詞をとることによって再帰的意味を表す与格型再帰用法は本稿独自の規定によるものである。これは再帰性を特徴づける意味素性の運動の方向と密接に関連する。第2部の最後に，第5章では，〈再帰性〉と〈統語現象〉の相関関係を簡略に考察した。形態的な特徴を持たない日本語と韓国語の再帰動詞の研究では，統語的特徴が再帰動詞を認定する重要な証拠となる。と同時に，他動性だけでは解決しきれなかった諸現象の分析に有効に働く概念として，再帰性の重要性を示すことにもなる。

第3部では，〈再帰性〉が〈ヴォイスの体系〉の中で実際にどのように機能するかに関し，対照言語学的な観点から考察した。第6章では，直接使役を表す〈使役動詞〉が再帰性を表す動詞から規則的に派生することを主張した。この際，韓国語における，2つの使役の使い分けが重要な手がかりを提供してくれた。間接的な働きかけを表す「サセル」・「게 하다 (ge hada)」形の使役文と，「サス」・「이 (i)」形の使役動詞との相違点を様々な観点から分析した。また，他動詞文との関係についても分析を行い，使役動詞文が他動詞文と間接使役の中間的なところに位置しながら，統語的にも意味的にも固有の役割を表す文法カテゴリーであることを提示した。第7章では，〈間接使役〉を表す「サセル」・「게 하다 (ge hada)」形を中心に，再帰性と関連した使役の諸問題に触れた。次に，第8章では，〈使役文の意味・用法〉について考察した。ここでは，使役文を使役主の動作主に対する働きかけの事態と動作主の動作実現の事態の二つの事態を包み込む複合的な事態として捉え，その事態の成立に関与する関与者の性質，使役事態に対する関与者の意図性のありか，事態間の継起関係及び基本動詞の有する性質等の要因を抽出し，使役文の固有の意味・用法を分類した。その中でも〈仕向け－利益収受／利益付与－〉は，再帰動詞を認めることによって導かれた意味・用法である。

第9章では，〈受動文〉と〈再帰性〉の関係を考察した。まず，直接受動文が成立しないのは能動文の動詞が再帰性を表す場合であることを検証した。また，韓国語を中心に，再帰動詞の「지다 (jida)」形から〈中間用法〉が派生することを考察し，その中間態的意味の発生と再帰動詞の根本的な性質，つまり，主体にのみ言及する性質が密接に関連していることを指摘した。第10章では，〈自動詞／他動詞〉と〈再帰性〉の関係を分析した。まず，表層上の

項の数と意味上の参与者の数が一致しない場合があることを指摘した。次に，再帰動詞が，その意味と照らし合わせて，絶対的にペアを持たない動詞であることを指摘した。

最後に，第4部では，〈アスペクト〉と〈再帰性〉の関連性を考察した。アスペクトに関連しては，本稿が再帰性に中心をおく研究であるため，アスペクト全般について述べたものではない。第11章では，両言語の再帰動詞のアスペクトの特徴を概観し，第12章では，アスペクトの一つの意味である結果残存の意味実現とその実現要因について述べた。アスペクトは動詞の意味を素直に反映させる側面を持っているため，アスペクトの観点からも再帰動詞の特徴が明確になった。

論文審査の結果の要旨

本論文は，日本語と韓国語を対象言語として，両言語のヴォイスの体系の中に新たに「再帰性」というカテゴリーを立てて位置づけることを目的としている。近年，中間態の研究が盛んであるが，それとは別に再帰現象全体を類型論的な立場から再検討しようという動きがある。しかし，それらの研究は一般に再帰のマーカーを持つ言語を対象としている一方，本論文のオリジナリティーは，再帰のマーカーを持たない日・韓両言語を対象として「再帰性」を意味的に規定し，それを様々な統語現象における振舞いの違いによって論証した点にある。その立場は，概ね機能的・認知論的なものであると言える。

様々な統語現象において再帰動詞および再帰構文が，非再帰的な動詞や構文との間に見せる振舞いの違いを見て行く際に，日本語よりも意味論的な違いに対して統語的に敏感に反応すると考えられる韓国語の場合をヒントに日本語の場合を検討するという形が取られることが多いが，いずれにしろ対照言語学的な手法を存分に用いた研究になっている。

論文の構成は，先ず意味論的に「再帰」のカテゴリーを検討して，基本的に再帰性を表す「再帰動詞」（「着る」，「（水・シャワーを）浴びる」「座る」「うなずく」等），他動詞がヲ格補語もしくはニ格補語に身体名詞または動作主と所有関係にあるものを取った「再帰用法」（「汗を拭く」「足を滑らせる」「顔を赤らめる」「口をつぐむ」「（自分の考えを）口にする」「... を手に取る」等）を認める。次にこれらの構文が持つ再帰性と，使役文，受動文，中間態，自発文等との関係を検討し，最後に再帰性とアスペクトとの関係に及んでいる。

本論文では，再帰性を，動作主を中心とする求心的運動と，対格補語が動作主と「所有関係」を持つという所有性によって特徴づける。そして，動作の「可視性」，「接触性」，「結果性」という素性を設定し，これらの素性の組合わせにより再帰用法を階層的に分類する。その際，これまで扱われることのなかった，ニ格補語の性質により再帰性が実現する与格型再帰用法をも取り込んだ。

次に，再帰性と使役文との関係を見て，本論文で規定した再帰性を表す動詞からは直接使役を表す「サス」「이」型の使役動詞が規則的に派生されるが，再帰性を表さない動詞からは間接使役しかないことを日・韓両言語に渡って論証している。（着る→着せる，着させる：捨てる→×捨てさす，捨てさせる）

また直接受動文が成立しない場合に関して，これまでの他動性による観点からの説明に替えて，再帰性を表す場合に直接受動文が成立しないと論じる。（食べる→×太郎によってご飯が食べられる）

その他，再帰性と韓国語の中間用法，自発態との関係，自・他動詞の対と再帰性との関係などを検討して，興味深い事実を指摘している。

最後に，日本語学での再帰の研究で一般に結果残存がよく問題にされることとも関連して，再帰性とアスペクトとの関係を概観して論文は終わっている。

本論文で規定された再帰性は，従来の日本語学での規定よりも広い範囲をカヴァーするものであり，基本的には「食べる」「行く」等の有生主語自動詞をも含んでいる。このような再帰性の範疇化に対しては，異なった立場から異論を立てることも可能ではあるが，本論文では明快な基準によって再帰性を定義した後は，首尾一貫した立場が貫かれており，様々な統語現象と再帰性との関係も，豊富な実例によって説得的に展開されている。

本論文で立てられた再帰性が真に汎言語的なカテゴリーとして有効かどうかは，さらにマーカーを持った言語との

比較などを通して今後さらに検討して行かなければならないが，本論文は日・韓両言語の再帰性に関しては完結した研究であり，再帰性ひいてはヴォイスの研究に対する刺激的な貢献と言うことができる。

以上により，本論文を言語文化学博士の学位請求論文として十分な価値を有するものと判定する。